

令和8年度 自ら学び 自ら考え 自ら行動する子を育てる



松林小だより



令和8年6月30日

第4号

茅ヶ崎市立松林小学校 校長 下反 達二

「弱さ」の力

現在、北米で開催されているサッカーのワールドカップ(W 杯)で世界中が盛り上がっています。輝くスター選手たちがピッチを駆け巡っていますが、サッカーというスポーツの面白いところは、「11 人のスター」を集めたチームが必ずしも勝つとは限らない点です。むしろ、自分の苦手(弱さ)を自覚し、それを仲間とどう補い合うかを知っているチームこそが、予想もしない力を発揮することがあります。自分の弱さを隠さずに「ここは苦手だから助けてほしい」と言えること、そして仲間の弱さを「自分がカバーしよう」と動けること。この関係性から生まれる力こそが、本当の力なのかもしれません。

今の世の中では、どちらかというと、強さやたくましさ、自立していることがしばしば価値あるものとして語られます。人より優れていること、失敗しないこと、弱音を吐かないことが、あたかも望ましい姿であるかのように受け止められる場面も少なくありません。しかし、教育の場に立つ私たちは、必ずしもそのように考えてはいません。むしろ、人がよりよく生き、豊かに学び合っていくためには、「弱さ」を見つめることがとても大切であると考えています。

子どもたちは、学校生活の中で実にさまざまな経験をします。学習で思うように理解が進まないこと、運動でうまくできないこと、友達との関係に悩むこと、新しいことに挑戦する不安を抱くこともあるでしょう。そうしたとき、自分の中にある弱さや限界に出会うことになります。けれども、その出会いは決して後ろ向きなものではありません。自分の弱さを知ることは、自分を深く見つめることにつながり、自分に必要な支えや努力の方向を考えるきっかけになります。

また、自分自身の苦しさやもどかしさを経験する人は、他者のつまずきにも気づくことができます。うまくできずに困っている友だちの気持ち、輪の中に入れず不安を感じている仲間の思いに、そっと寄り添うことができるのです。つまり、弱さは人を孤立させるものではなく、むしろ人と人をつなぐ力にもなります。相手の立場を想像し、思いやりをもって関わる力、これは、華やかな成功体験だけでは決して育ちません。悩んだこと、つまずいたこと、助けてもらったことの中でこそ、共感する心は育まれていくはずです。

だからこそ学校は、何でも一人でできる人を育てる場所である前に、自分のよさも課題も受け止めながら、仲間とともに成長していく場所でありたいと思います。困ったときに「助けて」と言えること、そしてその声に「大丈夫だよ」と応えられることは、どちらも大切な力です。弱さを隠さなければならない学校ではなく、弱さを認めても安心できる(具体的には、「分からない」と言える、悲しかったら泣ける、暗い気持ちの時には暗いままで居られる)学校であること。そのような安心感があるからこそ、子どもたちは失敗を恐れずに挑戦し、自分らしく学ぶことができます。

本校では、これからも、「弱さ」の中にこそ、成長と支え合いを生み出す力があることを、子どもたちとともに大切にしていきたいと思っています。



さて、気がつけば、子どもたちが楽しみにしている夏休みが目の前に迫ってきました。4 月のスタートから早3ヶ月。新しいクラスや環境に少しずつ慣れ、心も体もひと回り大きく成長した子どもたちの姿を頼もしく感じています。今月は夏休み前の締めくくりができるよう、教職員一同、一日一日を大切に指導にあたっています。

<お詫び>

先日の土曜参観につきましては、皆様が多忙なスケジュールを調整し、子どもたちの学校での姿を心待ちにされていたにもかかわらず、その機会を奪う結果となってしまいました。直前での急な予定変更により、各ご家庭に多大なるご迷惑とご心配をおかけしましたことを深くお詫び申し上げます。